

準他動詞について¹

緒 論

この小論は動詞の他動性と自動性についての考察の続きをなすものである。従って一部重複するところもあるが、これまでの経過をごく大ざっぱに述べておく必要があると考える²。

まず基本的な仮説として、(1) 動詞の有する意義と他の品詞の有する意義との相違は、これらが指示する対象乃至は対象の性質に関する相違というよりは、一定の意義を認識し、あるいは知覚する際の、認識の仕方における範疇的な相違であること、および(2) 動詞の有する意義的特性とは、言主が関わっている状況を構成する一定の要素(状況の変化の担い手)が、一定の時間のあいだに変化したことを感知し、変化した要素以外の状況をも考慮しつつ、この変化を「様式化」したものであること、を仮定した(動詞の意義 V , 状況 S , Δt 時間後の状況 S' とすれば、これは比喩的に $V : \Delta S / \Delta t = (S' - S) / \Delta t$ と表示できよう)。

この仮説に基いて次の定義を置く。

定義 0 (自動詞と他動詞)

行為を特定する状況の変化の担い手が主語に等しいとき、この行為を表わすものを自動詞とし、行為を特定する状況の変化の担い手が主語だけでなく、主語以外の対象としても存在するとき、これを他動詞と定義する。(従ってこの場合状況 S の内部構造が問題となる。状況 S を構成する特定の要素 x の状態 S_x 及び補助的な要素の状態 S_y の時間 Δt における変化をそれぞれ $\Delta S_x, \Delta S_y$ とし、付加的な条件の集合 K を考えれば、動詞の意義 V は、これら異質的なものの組に与えられると考えられる。定義から他動詞の意義 $V_{itr.} : [\Delta S_x / \Delta t, \Delta S_y / \Delta t, K]$ 、自動詞の意義 $V_{itr.} : [\Delta S_x / \Delta t, K]$ ³。

定義 0 から直ちに対格補語に関する次の定義が与えられる。

¹ 『ロシア語ロシア文学研究』 第8号 昭和51(1976)年10月 1-12頁。

² 詳細については拙稿 A Consideration on the Category of Transitivity in Russian, 『人文』 第20集(1974), pp. 44-54 参照。

³ これは飽くまで比喩であって、実際には $\Delta S_x / \Delta t, \Delta S_y / \Delta t$ で表示した変化は種々の「質」を含んでいる。この面から動詞の意義を考察したものに、ダネシの好論文がある。Fr. Daneš, Pokus o strukturní analýzu slovesných významů, SaS, 1971, č. 3, p. 193 & seq.

定義 1-1 (対格補語 イ)

対格補語は行為の認定のための状態の変化の担い手を表示する。

ところが例えば *видеть гору, обходить город* などの場合、対格補語の表示する対象は、状態の変化の担い手であるとは考えられない。アカデミー文法が「他動性が弱い」としているものである⁴。しかしこれらの動詞においても、対格補語の存在はその意義の成立のための必要不可欠な条件となっている。従ってこの種の補語をも包含するためには、**定義 1-1** の制限を緩和することが必要となる。

定義 1-2 (対格補語 ロ)

対格補語は行為の成立の条件を表示する。

即ち**定義 1-2**によれば、対格補語は必ずしも状態の変化の担い手でなくともよい。

ところが対格補語は従来純然たる自動詞とされているものにも伴われることがある。弱支配の対格である。これを説明する為には**定義 1-2**は未だ制限が厳格に過ぎる。これは更に緩和されなければならない。**定義 1-3**である。

定義 1-3 (対格補語 ハ)

対格補語は行為の成立の条件であると言主が主張する対象を表示する。

定義 1-3にいう対格補語は、行為の成立に不可欠な、いわば客観的な条件を表わすのではない。言主が一定の状況の存在のもとに、かかる条件が必要であると主観的に主張する対象を表わすのである。従ってこの種の補語の存在は、動詞の意義によって構造的に要求されるものではない。これについては機会があれば稿を改めて述べるつもりである。

本 論**準他動詞**

§1 従来の文法では、**定義 1-1**に対応する対格補語と**定義 1-2**の対格補語の何れかを要求する動詞を、他動詞としている。しかし**定義 0**に従えば**定義 1-1**に対応するもののみが、他動詞ということになる。この狭義の他動詞に対して準他動詞 (*quasi-transitiva*) を考え、次のように定義する。

定義 0-1 (準他動詞)

定義 1-2に対応する対格補語を要求する動詞を、準他動詞とする。

このように定義された準他動詞は、これが要求する対格補語の性質から、次のような特性をもっていると考えられる。即ち、この動詞の表示する行為の認定のための状態の変化

⁴АН СССР, *Грамматика русского языка*, I, М. 1960, p. 411

の担い手は、明らかに対格補語によって指示される対象ではなく、主語によってあらわされる対象でなければならない。この点この種の動詞は **定義0** にいう自動詞と等しい。しかし準他動詞のあらわす行為は、独り主語の状態の変化のみによっては、特定することができない。準他動詞はこの点において他動詞とも類似点を有している。

他動性の階梯

§2 以上の考察から、対格補語の三つの定義のうち何れに対応するものを補語とすることによって、他動性の強さを定義することができる。明らかに**定義1-1**による補語をとる動詞のぼあい、「他動性」が最も「強い」。アカデミー文法の主観的言語感覚による判定は、かくして客観的基準を獲得するのである。更に従来「若干の接頭辞は動詞の他動性を強める働きがある」といった曖昧な説明のままに見過ごされて来た一連の現象も⁵、これまで述べてきたことによって容易に説明することができる。例えば明らかな自動詞である *итти* に *пере-* が付加されれば *перейти мост* のように対格補語をとることができるようになり、「他動詞」となる。これは *пере-* の存在によって *перейти* なる行為が「越えらるべき」対象の存在を、その成立の条件として要求するに至ったからに外ならない。状態の変化の担い手は依然として主語である。従ってこの種の対格補語は**定義1-2**に規定せられるものとなる。換言すれば自動詞 *итти* は接頭辞 *пере-* をとることによって他動性を一階梯強め、準他動詞になったということになる。

§3 *читать* はこれまで述べてきたことからすれば準他動詞と考えられる。これに例えば接頭辞 *про-* を付加して成った *прочитать* は、*про-* と *читать* の双方の要求する対格補語をもたねばならない。これが別々にあらわされるとすれば、例えば *прочитать книгу всю ночь* のようになるであろう。しかし *прочитать* の場合には、一つの対格補語が二つの要求を同時に満たしているとみなければなるまい。したがってこれは *перейти мост* のような準他動詞よりは、対格補語の必要性が大であると考えられる。*читать* に対して *прочитать* が殆んどの場合対格補語を伴っているのは、このことによって説明できる。他方 *прочитать книгу всю ночь* の *книгу* と *всю ночь*、*прочитать книгу* の *книгу* の何れも**定義1-2**の対格補語であり、接頭辞の存在によっても**定義1-1**の対格補語をとることができない。したがって対格補語の必要度＝他動性の強さ、とした場合の他動性の強弱は、この場合準他動詞の内部における問題であると結論できる。*прочитать всю ночь* の場合は自動詞の *читать*⁶が *про-* の存在によって準他動詞になったものと考えればよい。

⁵例えば АН СССР, *Сравнительно-исторический синтаксис восточно-славянских языков. Члены предложения*, М. 1968, p. 215; В. В. Виноградов, *Русский язык*. 2-е изд., М. 1972. pp. 506-507.

⁶補注「読書をする」。

§4 本来の他動詞も、基本的にはこれと同じであつたに違いない。しかし接頭辞と基幹動詞が別の対格補語を要求し得る状態は早くに失われ、纔かに古代スラヴ語にその余喘を見出すに過ぎない。例えば

- (1) Повѣлѣ рабомъ прѣвести в рѣку Савау.
(彼は奴隷達に彼等をサヴァ河を渡すよう命じた。)

現代語ではこれは перевести детей через улицу のように、副詞句によって表現せられる。これは一種の論理化の結果であろうが、この副詞句も他の場合のように完全に自由な修飾語でないところに、なおその出自の記憶をとどめていると言うことができよう。

従つてこの場合も他動詞の枠内での「他動性」の強弱の問題であると考へられる。

「近い」対象と「遠い」対象

§5 準他動詞はこれまで述べて来たような中間的性格の故に、時としてその有する「他動性」に動揺を生じるであろうことは、容易に予測される。перейти мост/перейти через мост、переплыть море/переплыть через море などは、その典型的なものである。

このように分明ではないが、услыхать новость/услыхать про новость、узнать знакомого/узнать о знакомом、сказать слово/сказать о чем и про то 等もこれに属する現象であろう。これを意味が違うと云つて片づけることは、何等解決にはならない。「意味の違い」が何に基いているかが、特に知りたく思うところなのであるから。

ポテブニャは前者を「より近い」対象、後者を「より遠い」対象を、夫々示すものと規定している⁷。これに対しアカデミーの比較統辞論では、前者を прямое значение、後者を делиберативное значение と名付けている⁸。しかしこれらは何れも印象に基いた命名でしかない。ポテブニャは更にこの種の現象が生ずるのは、*verba sentiendi, cognoscendi, declarandi* においてであると述べているが、なぜ専らこれらの動詞にのみ、かかる現象がみとめられるかについては、何等触れるところがない。

しかしこれらの動詞が何れも**定義0-1**にいう準他動詞に属することを認識すれば、この現象がその有する「他動詞」の質にかかわっていると推論することは、むしろ自然であると考えられる。もしそうとするならば、問題はこれら準他動詞のうちで特に上述の種類のものに、何故この種の浮動が生ずるかという点に帰着する。

§6 *verba sentiendi, cognoscendi, declarandi* というのは、語彙的意義の共通性に基いた類別であるから、この現象は動詞の有する語彙的意義と関連しているとみられる。更に

⁷ А. А. Потебня, *Из записок по русской грамматике*, т. I-II, М. 1958, p. 296.

⁸ АН СССР, *Грамматика русского языка*, т. I, p. 206.

これらの三群についてその意義的共通性を考えれば、これらが何れも強い心理的性格を有していることが、挙げられよう。

心理的性格が強いというのは、主語の状態に重点がかかることを意味する。**定義0-1**の説明において述べたことからすれば、これらの動詞は準他動詞のうちでも、自動詞に近い位置を占めていると考えることができる。行為の成立の条件に重点をおけば他動詞として、行為主体の状況に着目すれば自動詞として、それぞれ使用することを得ると考えられるのである。もしそうとすれば「近い対象」をあらわす *прямое значение* は前者の場合に、「遠い対象」をあらわす *делиберативное значение* は後者の場合にあたる。

§7 これは程度の差こそあれ、動詞の語彙的意義に反映しないではおかないと期待される。例えば、

1. говорить что, о ком-чём = словесно выражать мысли / говорить о ком-чём = высказывать мнение, суждение, обсуждать что-н., свидетельствовать.
2. слышать кого-что = различать, воспринимать что-н. слухом / слышать о ком-чём⁹ = обладать каким-н. сѣдениями.
3. узнать кого-что = обнаружить в ком-чём-н. знакомого, знакомое / узнать о ком-чём разузнать, допытывать, получить сведения, известия о ком-чем-н ...

これらの例から明らかなように、「遠い」対象をあらわす場合は、「近い」対象をあらわす場合に較べて、主語と状況との関連がより密接だと考えられる。これに対し、「近い」対象をあらわす場合は、行為の成立の条件に興味の重点がかかっている。

もしこれらの動詞の意義が、何等かの事態についての主体的判断を含むとすれば、これは当然「遠い」対象として示されなければなるまい。что あるいは как によって導かれる副文章である。

歴史的経過

§8 *verba sentiendi, cognoscendi* 及び *declarandi* の対格補語使用における動揺は歴史的に発生したものであり、時代を遡ればそれだけ動揺の度も少なくなることが知られている。先に述べた二つの意義は、古代においては未分化であり、話者の意識においても未だ区別されていなかったと考えられる。例えば、

- (2) пошелъ бѣ Гюрги в Русь, слышавъ смерть Изяславу (= услышав о смерти Изяслава). (Ип. л.)

⁹原文では кого-что となっているが、これは明らかな校正ミスである。

- (3) Михаилъ же увѣдѣвъ *приятѣ киевское* (= узнав о впадении Киева) и бѣжа. (Ип. л.)
- (4) Борисъ же повѣда отцю своему *Изяслава* (= о приближении Изяслава) и рече... (Ип. л.)

むしろ *verba cogitandi* というべきものに属する例としては、

- (5) и тако въспоминаша томоу *страхъ бжци* и *любовь* еже къ братоу. (Ж. Феод. Печ.)
- (6) и помышляшеть же *мчнии* и *страсть* *стого мчнка* Никиты. (Сказ. о Б. и Г.)

§9 勿論古代ロシア語期においても、これらの動詞が「遠い」対象をあらわす構文をとることが、ないではなかった。例えば、

- (7) Всеволодъ же Гюргевичъ слышавъ о *Перюрьи оже тако створилъ*. (Лавр. л.)
- (8) Повѣдаша же Ярославоу о *всемь семь*. (Сказ. о Б. и Г.)

§10 更にこの種の対格補語が、場所をあらわす限定句を伴うこともあった。このような場合現代語では接続詞 *что* によって導かれる副文章によらないでは、これを表現できない。

- (9) *Изяславъ же слышавъ у здоровы сына* своего (= что сын находится в добром здоровье), и похвали бога. (Ип. л.)
- (10) Повѣдаша ему Володимера *в Чернигобъ* а *Изяслава у Стародубъ* (= что Владимир в Чернигове а *Изяслав* стоит около Стародуба). (Ип. л.)
- (11) услышавше Псковичи князя великого *дв Новьгородъ* (= что он в Новгороде) и послаша пословъ. (Пск. 1. л.)

§11 前節で述べたものほど明瞭ではないが、現代語ならば接続詞 *что* によって導かれる副文章によって表現せねばならないもの、あるいは前置詞による句によって表現するこ

ともできるが、副文章を用いて回説的に表現する方がより自然であると考えられるものが多く存在する。

このような傾向は、例えば *мнѣти* (考える、思う) のような、いわゆる *verba cogitandi* の場合に、特に著るしい。これは § 7 で述べたように、主語が何等かの判断を下すことをその内容とする動詞であることによると、思考せられる。例えば、

- (12) узрѣша наши сторожеве и *мняху* Болгарский полкъ (= думали, что это болгарский полк). (Лавр. л.)
- (13) Кобякъ *мнѣвѣ* толко Руси (= думая, что лишь только Руси), возвратися и погна въ слѣдъ ихъ. (Ип. л.)
- (14) Воевода же *разумѣвѣ* множество мятежа ... (= поняв что в мятеже много людей). (Ип. л.)
- (15) *Знаю* твое за Адама пострадание (= знаю, что ты пострадал за Адама). (Кир. Тур.)

§12 *verba cogitandi* 以外の動詞でも、文脈によって主語の何等かの判断を含むと考えられるとき、現代語では回説的な表現の方がより自然であると感じられる。例えば、

- (16) *видѣвѣ* же мало дружины своя (= увидев, что своей дружины мало = своя дружина малочисленна) рече собѣ... (Лавр. л.)
- (17) Се же *слышавѣ* царь приходъ князя Витовга (= услышав, что пришел князь Витовг), и посла къ нему послове. (Новг. 1. л.)
- (18) азъ радъ *слышавѣ* приѣздъ вашъ (= услышав, что вы приехали). (Троиц. л.)

以上のような対格の用法は、例えば Я полагаю вас от Москвы (Грибоедов)、сказывает журавля на сосне (Даль) などに未だその痕跡をとどめているといわれる。

§13 またこの種の対格補語が形容詞あるいは形動詞によって修飾せられることもあった。形容詞の場合は例えば、

- (19) Романовича же видѣвша мятежъ во земли *великъ*, убоястася. (Лавр. л.)
- (20) и привезоша и в Новъгородъ *мртѣвѣ*. (Новг. 1. л.)

(21) И прииде из Чернигова в землю Резанскую во свою отчину, и видя ея *пусту*. (Пов. о раз. Ряз.)

形動詞を伴うものとしては、例えば、

(22) идуще же емоу повѣдаша ему *оца̄ оумерша*. брат(а) старейшаго *сто-*
полка сѣдша на столѣ *оци*. (Чт. Б. и Г.)

(23) Завтра же видѣша людѣ князя *бѣжавша* възвратишася Киевоу.
(Лавр. л.)

(24) и приѣха види *повержена* Игоря *мртв*ого. (Ипат. л.)

これらの形容詞及び形動詞は、何れも通常第二対格 *второй винительный* の名のもとに包括されている。第二対格については稿を改めて考察せねばならないが、これらの諸例における形容詞あるいは形動詞を第二対格とせず、第一対格の修飾語と考へても、*verba dicendi*、*verba sentiendi*、*verba cognoscendi* および *verba movendi* に関する限り、何等の不都合も認められない。

§14 このような形動詞修飾語が存在していることによると推察されるが、限定句を伴う対格補語の場合にも、やがて形動詞による連辞的要素の付加によって、その論理的関係を明示的に表現しようとする傾向が生ずる。例えば、

(25) Она же видѣвъши *сна* своего въ таковѣи скърби *соуща*. (Ж. Феод. Печ.)

(26) и се видѣ *прквѣ* оу облака *соущоу*. (*ibid.*)

形容詞を伴っているものも同様にして、

(27) Видѣвъ ю добру *суцю* зѣло *лицемъ* и *смыслену*... (Лавр. л.)

(28) бысть жалостно зрѣти на нь, видячи его болна *суща*. (Ип. л.)

§15 勿論このことは、この構文が古い時代に全く存在しなかったことを意味するものではない。可能性としては古くから存在しており、古代スラヴ語にもその例を見出すことができる。例えば、

(29) *Ѡндоша оставльше н лѣжнва* *сѣща*. (Остр. ев.)

(30) *васъ мертвышѣ* *сѣща*. *сѣожнвнлѣ естъ съ ннмѣ*. (Потебня)

又この現象は本来同格補足語であったと考えられるものの間にも、みとめられる。例えば、

- (31) *видя же люди хрестьяны соуща, радовашеся душею и тѣломъ.*
(Кир. Тур.)

§16 このようにして上述の種類動詞に関して、単純な対格補語を伴うものと、形動詞によって現に修飾されているか、あるいは修飾される対格補語を伴うものとの、意義的な相違が、漸次顕著になって来つつあったと考えられる。

後者の場合について考えてみれば、次のようなものが、最も基本的な形であると言える。

- (32) ...*видѣша...на одрѣ царя Старчия спяща, а при возгласии его меч висящ.* (Воин. пов.)

ところが一般に古代語では形動詞の独立性(述語的性格)は、現代語におけるより遥かに高かったと考えられる。ここから時として次のような構文が生じる。

- (33) *царь же видя свои полки мнозии падоша.* (Воин. пов.)

すなわちここでは対格補語を修飾すべき形動詞のかわりに、定動詞が置かれているのである。ポテブニャはこれに関連して、例えば ἦδε γὰρ κατὰ θύμον ἀδελφεὸν, ὡς ἐπονείτο (Hom. II. II. 409) «というのは彼 (i.e. メネラオス) は弟がどのように苦悩しているかを、心のうちで知っていたから」、ἔνθα δὲ οἱ Ἕλληνας ἐγνώσαν πλαίσιον ἰδόπλευρον, ὅτι πονηρὰ τάξις εἶη πολεμίων ἐπομένων (Xenoph. Anab. III. 4, 19) «そこでギリシア軍は、四角隊形が迫撃戦に不利な隊形であることを知った」、καὶ μοι τὸν υἱὸν εἶπέ, εἰ μεμάθηκε τὴν τέχνην (Curt.) «そして息子とその子どもを教えたのかどうか私に告げよ」、nosti Marcellum quam tardus sit «マルケルスがいかに遅いか、お前は知っているよ»のような、いわゆる *anticipatio*、*πρόληψις* の例を挙げ¹⁰、次のように述べている。

「ここに *ατтракция* をみること、即ち接続詞を伴う構文を出発点と考えることは誤りであると思われる。反対に最初の構文における対格は、主文章が副文章の全体を合成補語の形で自己のうちに含めていた構文の名残でありうる」¹¹と。卓見と言うべきであろう。

§17 この傾向が更に進めば、やがて対格補語そのものも、主格名詞によって置換されるに至ると予想される。事実たとえば、

- (34) ...*видѣша на столѣ свешта горит.* (Воин. пов.)

これは現在 *бессоюзное сложные дополнительные предложения* という名のもとに分類されているものに該当する。例えば、

¹⁰ A. A. Потебня, *op. cit.* p. 317.

¹¹ *ibid.*

- (35) СейДионийиеще не приход в веру Христову... и *видев солнце* во тьму *преложися* и луна в кровь... (Авв. Жит.)
- (36) Нынѣ бо *видимъ* и *слышимъ* кромѣ божественнаго устава многия церковныя *чины* не сполна *совершаются* не по священнымъ правиломъ и не по уставу. (Стоглав)

これが前節で述べた構文の発展であろうことは、これらに用いられている動詞の種類が一致していることから確かめられる。この種の構文についてボルコフスキーは次のように言う。「接続詞のない補語的複合文の特徴は、その最初の部分に、第二の補語的部分を導く、感覚、思惟活動、意志あるいは情緒的状态、発話、伝達をあらわす他動詞が存在することである¹²。我々の用語に従えば、これらは「心理的性格が強く、従って他動性の比較的低い準他動詞」ということになる。

またこれが接続詞の省略乃至は脱落によって成立した構文でないことについては、ポテブニャの次のような見解がある。

この形式は蒼古の昔より俗語の中に保存されて現代まで伝えられている。その際現在では関係小詞の発達によって、あたかもこの種の小詞が省略せられたかのような外観を呈している¹³。

§18 他方例 (33) に挙げたような構文の内包する論理的不整合は、関係詞を挿入することによって対格補語を修飾する関係節を作っても、匡すことができるであろう。例えば、

- (37) Половци же услышавше Русь *оже* пришли на них, ради быша. (Лавр. л.)

оже はやがて接続詞として意識されるようになるが、その経過については、未だ詳かにしない。あるいはこの構文と接続詞のない補語的複合文との混淆の結果であるかも知れない。この場合にも動詞の意義が、双方の構文の場合と同じことだけは確かである。例えば、

- (38) И увѣдавъ Изяславъ, *оже* на нь хотять ратью поити. (Ип. л.)
- (39) Изяславъ же слышавъ, *оже* Богъ поялъ брата его. (Ип. л.)

付言すれば、この種の構文については、ロムチェフの次のような説明がある。

能動形動詞の第二対格をもった構文、および知覚、思惟、感覚の動詞に伴われる形動詞の構文は、古い質の要素であり、漸次死滅して行った。これらの動詞において新しい質の要素

¹² В. И. Борковский, *Сравнительно-историч. Синтаксис восточно-славянск. яз.* Бессознательные сложные предложения сопоставляемые со сложноподчиненными, М. 1972, p. 107.

¹³ А. А. Потебня, *op. cit.*, т. III, p. 259.

となったのは副文章である。知覚、思惟及び感覚の動詞に伴われた目的副文の位置については、接続詞の機能をもつようになった指示代名詞をもつ文章であった。古代の文献には接続詞 *оже* のこのような使用がみとめられる¹⁴。

ロムチェフのこの正しい指摘を *post hoc propter hoc* に陥らせないためには、なぜ「知覚、思惟、感覚の動詞」においてこの構文が「古い質の要素」であり、「漸次死滅して行」かねばならなかったのか、またなぜこの構文が *оже* によって導かれる副文章によって置換されるに至ったのか、についての説明が必要とされよう。

§19 疑問詞によって導かれる副文章を伴うものも、主動詞の種類に関しては上述の場合と平行している。例えば、

(40) *Исповѣжь ны, отче, въру Варяжьскую, какова есть.* (Поуч. Феод.)

(41) *Не въдяху князя Юрья, кдѣ есть.* (Новг. 1. л.)

もしこの前段階として **исповѣжь въру Варяжьскую* 如く *сущю*, **въдяху князя Юрья кдѣ суща* のようなものを仮定することができるのであれば、この種の構文もこれまで行って来た議論の中に含めることができよう。

結 語

以上動詞の意義についての一般的仮定から準他動詞を定義し、その意義的特性を考察してきた。又この準他動詞に属する *verba sentiendi, cognoscendi, declarandi*, あるいは更に *verba cogitandi, loquendi* などについて、対格補語の要求の仕方に動揺の存することを指摘し、その原因をこれらの動詞の意義的特性に求めた。準他動詞の意義の有する二面性によって、主語の状態の変化に重点のあるときには「遠い」対象をとり、行為の成立の条件に着目すれば、「近い」対象をとるというのである。

この観点からすれば、内容を示す副文章の成立も、このような準他動詞のもつ二面性と無縁なものではないと考えられる。この場合には主語の何等かの判断を含むという意味で、主語の状態に更に大きな比重がかかることを意味するからである。ポテブニャ流の言い方を借りれば、これは「最も遠い」対象をあらわすものでなければならない。

筆者は言語の文法構造というものも、具体的な語彙的意義に体现される言語の内容と形式との間の、絶えざる矛盾と葛藤のうちに、語彙的意義自身の中から立ち上がって来るものであると考えている。ロシア語における *paratax* から *hypotax* への道程にも、このような語彙的意義の二面性が、その動因として潜んでいたと、思われてならないのである。

¹⁴Т. П. Ломтев, *Очерки по историческому синтаксису русского языка*, МГУ 1956, p. 542.

以上の考察から、「準他動詞」なるものが決して架空の恣意的な範疇ではないことが、確かめられたと言ってもよいのではないかと考えている。

1975.12.22.